

渡辺先生の学恩に感謝して

佐藤満洋

昭和四十年四月末の或る日、私は教材用に拝借していた丹生出土の旧石器を、分大の富来隆先生にお返しするため、先生の研究室をお訪ねした。生憎、その日は先生のお休み日だった。

そこにちょうど渡辺澄夫先生が出勤されて「僕の部屋でお茶でも飲まんかね」とお声をかけられ、恐る恐る先生の研究室をお訪ねした。それまでは先生とあまりお話しをする機会はなかったが、先生は紅茶をいれて下さりながら「佐藤君、古文書を読んでみないかね。古文書の一点一点が歴史を彷彿させてくるんだよ」とおっしゃって、古文書を何点か机の上に広げて見せて下さった。私は「古文書はようやく単位は取得しましたが、あまり読めません」と申し上げると、「君は午前中空いているんじゃないかね。学生といっしょに古文書を読んでみなさい」とおっしゃって下さった。当時私は大分工業高校定時制に勤務していたので、午前中は自由時間だった。そして大学の近くに住んでいたので先生のお言葉に甘えて、聴講生として先生の研究室に通うことになった。

その年の夏、津久見の先生のお宅で先生所蔵の、文禄二年の豊後国検地帳を拝見する幸運に恵まれた。当時私は検地帳の表紙に「上ノ村・中ノ村・下ノ村」などと書かれているのは村の位置を示すものかと考えていた。しかしこの時、石盛を計算した結果、村位を示すものであることを知ることができた。

そこで先生の畿内荘園の「均等名」に倣って、このことをうまく表現できる言葉をと考えて「村別石盛制」と仮称し、後に「村位別石盛制」と呼称することにした。太閤検地の研究をはじめ、何がしかの研究をしうるようになったのは、先生からお声をかけていただき、古文書の手解きをいただくことができたお陰であると先生の学恩に深く感謝している次第である。

(NHK学園講師)